HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	The Eternal Pursuit of Arbitrary God : Melville's Method of Provoking Immortality [an abstract of entire text]
Author(s)	鈴木, 一生
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13837号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78706
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Issei_Suzuki_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：鈴　木　一　生

学位論文題名
The Eternal Pursuit of Arbitrary God:
Melville's Method of Provoking Immortality
（終わりなき恣意的な神の追跡：メルヴィルによる永遠性の呼び起こし）

本論文は、19 世紀アメリカン・ルネサンス期に活躍した作家の一人であるハーマン・メルヴィルの小説を取り上げ、その文学的特質について、主に作品中に現れる作者自身の宗教観から考察している。メルヴィルは、厳格なカルヴィニズムの家庭で幼少期を過ごしたが、のちに捕鯨船や海軍の船員としての経験を積むにつれ、次第に人間の自由意志よりも神の意志を尊重する運命論に対し、懐疑的な態度を取るようになったことが知られている。こうした作者自身の宗教的葛藤が彼の創作活動に色濃く影響を与えていたことは、従来の諸研究でも度々指摘されてきたが、本論文では特に、メルヴィル作品に頻出する分身の描写に着目し、自由意志対神意の主題を、一人物の内部における分裂として読み替える試みを行っている。

本論文の方法は、文学研究における伝統的な手法である作品の精読を主として、複数の作品に共通して現れる文学的特徴のパターン解明を試みるものである。また、作者自身の伝記的背景や、作品執筆当時の歴史・社会的背景、宗教・思想などについての先行研究にも十分配慮した上で、メルヴィル作品の芸術性について多角的に考察することを目指した。

4 章からなる本論文の序章では、メルヴィル作品に繰り返し現れる分身が、神によって予め定められた自己の姿であり、自由意志に従う自己との対立を招くことが指摘される。メルヴィルの作品中では、登場人物が自由意志と神意のどちらに従って生きるべきか、すなわち、自由意志に従う彼／彼女と、神意に従う分身を一致させるべきか否かが繰り返し問われるが、メルヴィルは一貫して、その両者を一致させようとはしない。いわば、自分自身が予定的な自己の姿である分身から常に一歩遅れることで、自由意志の独立を保持しようとするのである。本論文では、こうした複数の作品に共通して現れるパターンについて、メルヴィルが個々の作品においていかに展開していったのか、各章において精査している。

第 1 章 "Following Your Shadow: The Battle of Wits between Body and Mind in 'Benito Cereno'" では、中編作品"Benito Cereno"を扱い、同作品におけるスローガン「汝の先導者に従え」が、作中の登場人物たちにとって重要であるばかりでなく、作者メルヴィルの創作活動におけ

るスローガンでもあったことを明らかにしている。この「汝の先導者に従え」の言葉が、同作品そのものを、ひいてはメルヴィル自身の創作活動を駆動するスローガンとなる謎を解くために、本章では“Benito Cereno”を、同時期に執筆された 3 つの短編――“The Lightning-Rod Man,” “The Happy Failure,” “The Bell-Tower”――と比較することで、解釈を行っている。これらの作品において登場する分身は、預言者や神意を体現する者としての役割を担う leader として描かれる一方で、自由意志に従う自己は、follower として描かれる。本論文は、上記の各作品において、このような leader-follower の関係性に着目し、両者が一致するとき、そこに死が訪れるパターンが観察されることを指摘する。つまり、メルヴィルは、自由意志と神意の完全一致を複数の作品において忌避し、人間を、常に神という leader から一歩遅れた follower として描くことで、神の意志に絶対的に従う運命論的な生き方に対する懐疑心を表明している。しかし、メルヴィルはこうした一人物における分裂と、それに伴う自己と分身との不一致を悲観していたわけではなく、むしろ、自由意志と神意の齟齬にこそ、神と人間の理想的な関係性を見出す契機を見出していた。本章の最後では、“Benito Cereno”が旧約聖書の「伝道の書」から受けた影響について考察しているが、メルヴィルは、“Benito Cereno” の登場人物たちが、神に対する永遠の follower であろうとしたのと同様に、預言者ソロモンに「従って」、同作品の執筆に励んだことが明らかにされる。このように、「汝の先導者に従え」は、“Benito Cereno”の作中人物たちのみならず、メルヴィル自身の執筆活動におけるスローガンでもあった。

第 2 章“Melville’s Delay in ‘Bartleby, the Scrivener’ and *Moby-Dick*: Literary Borrowings from William Shakespeare”では、短編“Bartleby, the Scrivener”と長編 *Moby-Dick* が、ウィリアム・シェイクスピアの *Hamlet* との影響関係から考察される。本論文は、“Bartleby”と *Moby-Dick* において、登場人物たちが予定された物事を繰り返し延期することに注目し、そのような遅れが、自由意志と神意の間に生じる遅れを表象することを明らかにしている。さらに、この遅延のテーマについて、メルヴィルがシェイクスピアの *Hamlet* から着想を得た可能性が論じられる。*Hamlet* をめぐる先行研究では、父親を殺されたハムレットが、その犯人である叔父クローディアスへの復讐を延期し続ける理由について長らく論じられてきたが、本論文は、メルヴィルもまた、この謎に小説家として向き合い、そうした遅延を、人間が神の意志と折り合いをつけて生きていくための鍵として理解していた、と結論付ける。しかし、ハムレットが彼の分身である叔父クローディアスを殺したとき、自らも死ぬ *Hamlet* の結末に対し、メルヴィルの *Moby-Dick* では、エイハブ船長率いる船員たちは、彼らの分身である白鯨とともに死を迎えるものの、イシュメールはただ一人生き残り、同作品の冒頭に戻り、再び語り手としてこの捕鯨物語を開始する点で、両者には差異が見られる。ハムレットは、結末で自らの分身クローディアスとの一致を遂げるが、メルヴィルは結末でのイシュメールと白鯨の一致を回避し、さらには円環的な物語構造を用いることで、語りの終着点をも先延ばしにする。こうした語りの終着点への遅延が、メルヴィルにとっては、自由意志と神意の関係において、積極的に作用するのである。

第 3 章 “Melville’s Dyptychs and Immortality: ‘The Two Temples’ and ‘Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs’では、メルヴィル研究において「二つ折り絵」と称されてきた短編 2 作を扱い、両作品の合わせ鏡的な構造が、分身の主題を描く上で効果的に作用していることが指摘される。まず、“The Two Temples”に関する議論では、執筆当時の文化的背景を踏まえた上で、当時の読者であればペアとして連想するはずのものが作中にいくつか登場するものの、一貫してペアの片割れのみが描かれる点に着目している。本論文では、メルヴィルがこのような手法を取った理由について、ある一つのものにもう一方を重ね、そこに二重性を生み出すためであると主張する。さらに、“The Two Temples”の後半部では、物語の舞台があたかも水中であるかのように描かれる点を指摘し、*Moby-Dick* におけるナルキッソス神話への言及なども踏まえながら、メルヴィルが、本作品の前半を自由意志が通用する生の世界、後半を神の意志で動く死の世界として描こうとしていたことを確認し、作品中で生と死のあいだに存在する人間の姿を描くものの、それが合わせ鏡に映る像であるがゆえ、永久に手の届かない場所に存在する自己像であることを明らかにしている。また、“Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs”についての議論では、同作品がチャリティーの主題を扱い、富者から貧者への施しがうまくいかない一方で、貧者から富者への逆転した施しが仄めかされることを指摘している。その上で、“The Two Temples”と同様に「二つ折り絵」構造を持つ本作品において貧者から富者へと施されるものとは、本物と偽物のように、相反する対立物が合わせ鏡の中で重なり合ったときに姿を現す物事が持つ価値である、と結論付けられる。

第 4 章“Melville’s Domestic Fictions and the Symbolization of the Past: ‘The Apple-Tree Table’ and ‘I and My Chimney’”は、メルヴィルによる家庭小説として知られる 2 作にもまた、ここまでに論じてきた、彼の作品に固有の「届かない感覚」が見られることを確認している。 まず、“The Apple-Tree Table”について論じるパートでは、メルヴィルによる独創的な時間感覚について言及している。一般的に時間の流れとは、直線的な一つの流れとして解されるが、メルヴィルは、現在が決して未来に到達せずに先延ばされ、その結果、複数的な時間の流れが生じる様子を描いている。また、“I and My Chimney”をめぐる議論では、作品の中心的なモチーフである巨大な煙突の寓意性を読み取ることが、数々の先行研究における主な目的であったことを確認した上で、本論文はそうした議論とは一旦距離を置き、作中でその存在が仄めかされるも、具体的な在りかが明示されることなく、批評家や研究者たちもさほど重要視してこなかった、秘密の小部屋のモチーフに光をあてる。作中では、登場人物たちがある目的地を通り過ぎたり、迂回を繰り返してしまうことで、そこへ到達できない様子が何度も描かれる。本論文では、メルヴィルが、そうした辿り着けない感覚を意識的に描き出そうとしたことを例証し、秘密の小部屋のモチーフが、読者がそのような到着できない感覚を、登場人物たちと共有するための仕掛けの一つであると論じている。つまり、作者だけが持つ「知」と、そこへ至れない登場人物や読者という構図は、神のみが知り得る「知」と、そこへ絶対に到達できない人間という構図を反映しているのである。

結論では、本研究の成果をアメリカ文学史研究の文脈に位置付ける、マクロ的な議論の試みを行っている。リチャード・チェイスらの先行研究を参照しつつ、アメリカ文学におけるロマンス性の特徴が矛盾や不一致にあることを確認し、メルヴィル作品のロマンス性について、考察が行われる。さらに、本論文が明らかにしたメルヴィル作品の特質を振り返りつつ、同時代作家であるナサニエル・ホーソーンやラルフ・ウォルド・エマソンらの作品と比較・検討することで、今後の研究における展望が示されている。